

プロスポーツ会場における共同募金活動を通じた大学生の主体形成と寄付文化の醸成

○相模女子大学 横地 厚 (10206)

キーワード3つ：共同募金、主体形成、寄付文化

1. 研究目的

近年、町内会や民生委員など、地域福祉活動の担い手不足が深刻化している。従来の「支援者－被支援者」という固定的な関係性を超えた新たな社会参加モデルの構築が求められるなか、特に若年層の地域福祉への参加促進と寄付行動の活性化は、持続可能な共生社会の実現に向けた重要な課題である。

そこで本研究は、非日常空間であるプロスポーツ会場における共同募金活動が、大学生の主体形成と寄付文化の醸成に与える影響を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

プロスポーツ会場での共同募金活動に参加した大学生を対象に、活動経験・参加動機・他者理解の変容・自己認識の変化・寄付行動の波及の5領域について半構造化インタビューを実施した。

質的内容分析法により、主体形成および寄付文化の醸成のプロセスを「情動的関与→認知的気づき→行動の持続→文化的伝達」という段階モデルで整理した。分析にあたっては、スポーツイベントが持つ祝祭性と開放性に着目し、①心理的参加障壁の低減、②双方向的関係性の形成、③持続志向的な社会参加意識の醸成、④寄付文化の社会的伝播、の視点を設定した。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守して実施した。研究対象者には研究の趣旨、個人情報保護、学術発表における匿名性の保証について十分に説明し、書面による同意を得た。なお、本研究に関連する利益相反(COI)はない。

4. 研究結果

インタビュー結果から、参加学生の半数以上はボランティア経験に乏しく、これまでの活動では、義務的に取り組まされている感覚や苦手意識を抱く学生も見受けられた。

しかし、プロスポーツ会場での共同募金活動では、参加学生の認識に大きな変化が見られた。「意外と皆さん気軽に立ち寄って募金をしてくださる方が多くて」「人の優しさのようなものを目の当たりにし、こういう世界もあるのだと驚き感銘を受けました」といった語りが示すように、スタジアムの開放的雰囲気が心理的安心感をもたらしていた。

主体形成と寄付文化醸成のプロセスでは、段階的变化が確認された。初期段階では「声掛けへの抵抗感」があったものの、スタジアムの熱狂的な雰囲気や来場者との交流を通じ

て「お祭りの中に参加している楽しさ」や「支え合いの相互性」を実感するようになった。中盤では、車椅子利用者や多様な動機を持つ募金者との関わりが、他者理解の深化や固定観念の変容を促した。「バッジが欲しいから募金する人」「純粋に社会貢献したい人」など、さまざまな参加動機への共感が広がり、支援関係の一方方向性に対する疑問も生まれた。最終段階では、「地域の支え手」としての自覚が芽生え、駅頭募金への協力や後輩指導への責任感も生まれていた。

加えて、「人の役に立つことは心地いい」「金銭が発生しないのは幸せな行動だ」という内発的動機の獲得が、持続的な社会参加や寄付行動への基盤を形成することが示唆された。さらに、参加学生は家族や友人に募金の意義を伝える「寄付文化の媒介者」としての役割も確認され、寄付文化の波及・広がりが促進された。

5. 考察

本研究は、プロスポーツ会場が「限定的非日常空間」として、若年層の主体形成を促進するとともに、福祉教育および寄付文化の醸成に独自の価値を持つことを明らかにした。具体的には、祝祭空間の特性が従来の地域福祉実践の参加障壁を緩和し、「楽しさ」と「社会性」が統合されることで、内発的動機の形成が促進された。「金銭が発生しないことが、人生において幸福な行動であると気づいた」という語りは、ボランティア活動の本質的意義への理解を示している。

共同募金活動は、単なる資金調達手段にとどまらず、参加者の自己効力感や社会的責任意識を育む教育的機能を有していた。特に、バッジ配布等による可視化されたフィードバックは成功体験を具体化し、段階的な目標設定を可能にした点も、新たな知見として注目される。

また、「協調性」や「仲間と頑張る気持ち」の育成、「人と人が繋がることの大切さ」への気づきなど、社会関係資本の理解促進も重要な成果であった。

さらに、参加学生が家族や友人に寄付行動の意義を伝えることを通じて、寄付文化が社会的に波及・広がる連鎖的効果も確認された。これは、寄付文化の醸成において重要な示唆を与えている。学生は自身の体験や学びを積極的に共有し、寄付の意義や楽しさ、社会的な価値を身近な人々へ伝播していた。「募金活動は想像以上に楽しく、人の優しさや社会の温かさに触れられた」「誰かのために行動することが、自分自身にも心地よさや達成感をもたらした」といった感想を語ることで、家族や友人の寄付への関心や理解を広げる契機となっていた。こうした語りや体験の共有は、一過性の活動にとどまらず、周囲の人々の寄付行動や社会参加への心理的ハードルを下げ、寄付文化の裾野を広げる波及効果を生み出している。

プロスポーツ会場での共同募金活動は、大学生の社会参加意識の醸成にとどまらず、複層的な効果を有していた。活動を通じて得られる「達成感」「つながり」「他者理解」といった経験は、大学生の主体形成の基盤となり、持続的な社会参加や寄付行動を促進する。さらに、参加学生が身近な人々との相互作用を通じて寄付文化の伝播を担う媒介者となることで、寄付文化の社会的拡大にも寄与している。

今後の課題として、大学生の主体的かつ継続的な社会参加を支援する体制整備と、寄付文化の持続的な醸成と波及を支える仕組みの構築が求められる。